



特集：環境都市の交通まちづくり

[名鉄“公共交通中心”への新たな取り組み]



電車で、ECO MOVE.

地域とともに環境にやさしい交通まちづくりを進める。

名古屋鉄道株式会社（名鉄）は、
鉄道の環境優位性への理解を広げることで鉄道利用を促進、
地域とともに環境負荷の低減に取り組んでいる。
自社内で実施するさまざまな環境対策、早くから手がけたパーク・アンド・ライド事業、
そして、さらなるインターモーダル推進事業の検討。
名鉄の取り組みは、常に“環境の視点”から始まっている。
環境都市・名古屋で交通まちづくりに貢献する名鉄の取り組みを紹介する。

文●茶木 環（ジャーナリスト） 撮影●織本知之 写真提供●名古屋鉄道株式会社



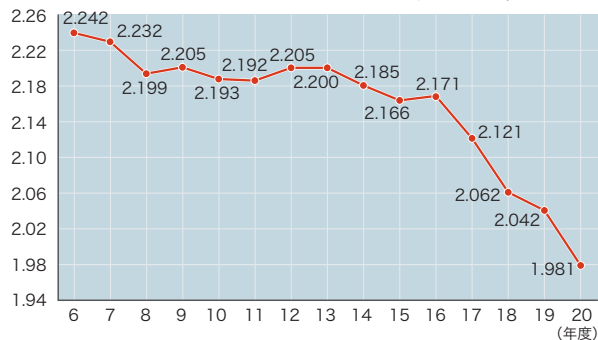
名古屋鉄道株式会社
経営企画部（企画担当）

西尾 佳美
Yoshimi NISHIO

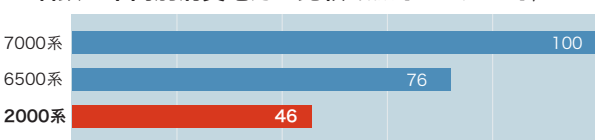
特集：環境都市の交通まちづくり

[名鉄「公共交通中心」への新たな取り組み]

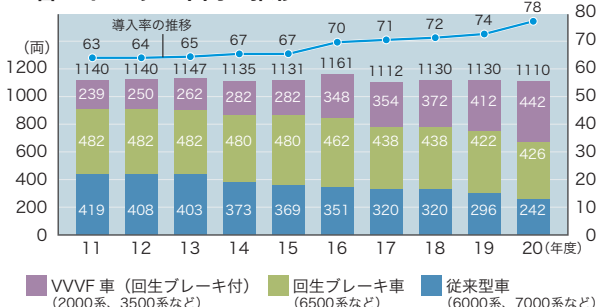
■1車両1キロあたりの電力使用量の推移 (kWh/Car-km)



■名鉄の車両別消費電力の比較 (指数 [7000系=100])



■省エネルギー車両の推移



平成13年に改装した環境モデル駅の尾張瀬戸駅

平成16年度にデビューした最新鋭の通勤型省エネルギー車両 (3300系)

省エネ車両で運転電力原単位を向上

名鉄では、平成10年に環境問題への行動計画「名鉄エコ・ビジョン」を策定して以来、組織的、継続的に環境活動に取り組んできた。平成18年4月には、その取り組みを名鉄グループ全体に拡大。「名鉄グループエコ・ビジョン」を策定するとともに推進体制を整え、グループ全体での環境活動の深度化を図っている。

この名鉄グループエコ・ビジョンのもと、名鉄では、平成19年に「名鉄エコ・プラン」を改めて制定した。鉄道事業における環境活動の4つの行動指針「環境負荷の軽減」「利便性の向上」「地域環境貢献」「環境法令の遵守」を掲げたものだ。

ここでは「環境負荷の軽減」のための取り組みをいくつか紹介してみたい。環境負荷の軽減で中心となる取り組みは、運転電力の削減だ。運転電力は、電気の総使用量の約9割を占める。そこで、名鉄では運転電力原単位（電車1両が1km走行するのに必要な電力量）の具体的な数値目標を設定。原単位の向上に努めている。

目標は、平成22年度の運転電力原単位を全線で、平成18年度比マイナス4%（1.98kWh/Car-km）まで落とすこと。1年前倒しで21年度内に達成できる見通しだ。

その大きな理由としては、省エネ

ギー車両の導入が挙げられる。旧型車両の計画的な更新を進める名鉄では、電力回生ブレーキシステムやVVVFインバータ制御機能を搭載した省エネルギー車両を順次導入。消費電力の削減を図ってきた。

省エネルギー車両導入による効果は、旧型車両と省エネルギー車両の消費電力を比較してみるとよくわかる。中部国際空港アクセス専用特急列車として平成17年に誕生したミュースカイ（2000系）の消費電力は、旧型車両のパノラマカー（7000系）のわずか46%にとどまっている。平成20年度末現在、省エネルギー車両は868両、全車両数の78%に達しているが、名鉄ではさらに省エネルギー車両の導入を推進していく方針だ。

その他にも、車両走行キロの削減や効率的なダイヤ編成・車両運用の推進、さらには乗務員が勉強会を開き節電運転を研究、節電を意識した運転操作を心がけるなど、ハード・ソフト両面で運転電力原単位の向上を目指している。

リサイクルや自然エネルギーの利用も

リサイクルや自然エネルギーの利用も、環境負荷低減の取り組みだ。

名鉄の使用済み乗車券リサイクルの取り組みは平成7年に始まった。翌8年度には、リサイクルシステムが稼働し、



「エコムートレイン」記念出発式（平成20年6月5日）



岐阜幼稚園・園児が描いた個性豊かな「夢のエコ電車」

段階的に処理量が増加。18年度には、定期券やカード類も含むすべての使用済み乗車券のリサイクルに成功、リサイクル率100%を達成している。

20年度には38トンの使用済み乗車券をリサイクル処理し、駅に設置するベンチや分別ボックス、トイレトペーパー、名刺・封筒などの事務用品などに再生している。名鉄沿線駅には、同年度、新たに67台のリサイクルベンチが設置された。また、他の鉄道事業者（20年度末で20社局）にもこのリサイクルシステムを広げている。

リサイクルの他、省エネルギー対策として採用しているのが、自然エネルギーの利用だ。平成13年には「環境モデル駅」として尾張瀬戸駅を改装。屋根上に太陽光発電パネルを設置して駅構内の照明の一部を賄っている他、雨水タンクで貯めた雨水をトイレの洗浄水として活用するなど、環境対応設備を導入して自然エネルギーの利用に努めている。

鉄道利用促進キャンペーンの実施

さまざまな施策で環境負荷の軽減を進め、成果を上げている名鉄だが、鉄道事業者として地域とともに環境負荷の低減に取り組みたいと、平成18年6月から、鉄道利用促進のキャンペーンを開始している。「電車で、ECOMOVE。」キャンペーンだ。

1人を1km運ぶ際に排出される

CO₂量を比較すると、鉄道は車の9分の1に過ぎない。鉄道は環境にやさしい移動手段であり、電車で移動するという行動そのものが、最も「身近で簡単な環境活動」とも言える。

キャッチフレーズの「ECOMOVE。」には「環境にやさしい移動をしよう」「環境にやさしい行動をしよう」というメッセージを込めた。

「この『電車で、ECOMOVE。』キャンペーンの一環として、平成20年には『名鉄エコプロジェクト』を立ち上げた。期間中、名鉄グループの環境への取り組みをご理解いただき、地域のお客さまとともに環境について考えるさまざまなイベントを実施している」と、経営企画部企画担当の西尾佳美さんは説明する。

2年目となる「名鉄エコプロジェクト2009」は、環境の日の6月5日から10月31日まで開催。環境に関連するイベントの開催を通じて、地域の人々に環境問題について考える機会を提供した。

このプロジェクトのシンボルとして、期間中、各線を走行するのがラッピング電車「エコムートレイン」だ。使用車両は回生ブレーキシステムなどを搭載した省エネルギー車両3300系の4両編成。地球環境保全をイメージしたデザインでラッピングされ、グリーンラインには木々やまち、名古屋駅前のシンボル「ナナちゃん」などが配さ

れている。

「名鉄の電車は赤や青を基調とした車両が多いので、鮮やかなグリーンが目をはき、ファンも多い」と西尾さん。

車内の広告スペースも、名鉄エコプロジェクトの紹介やメッセージを掲示、名鉄グループ各社における環境への取り組みなど「環境ポスターでジャックした」。

8月の夏休み期間中は、地元の幼稚園児たちが描いた「夢のエコ電車」の車内展覧会を開催した。エコムートレインの運行ダイヤを知らせてあげる、たくさんのお客さまが自分たちの絵を見に乗りしてくれたそうだ。

イベントに子どもたちに参加してもらうことについて、「小さな頃から、電車や環境に興味を持ち、意識を育ててほしい。子どもたちが関心を持つことによって、親である大人たちも環境を意識するようになる」と、西尾さんは話す。

初年度、小学生の親子を対象に実施した「エコセミナー」を「親子で学ぶECO教室」としてプログラムを拡充したのも、そうした狙いがある。「親子で学ぶECO教室」では、エコムートレインを臨時列車として走らせ、車内で地球温暖化や環境への取り組みについて学ぶセミナーに、環境に取り組む企業の施設見学、体験実習をプラスした。中部国際空港株式会社とタイアップした教室では、車内セミナーの後、

特集：環境都市の交通まちづくり

[名鉄「公共交通中心」への新たな取り組み]



小学生とその親 120 組が参加した「親子で学ぶ ECO 教室」車内セミナーの様子



日本モンキーセンターでサル（ゴリラ）の行動観察を



名古屋市内の全事業所が 名古屋市エコ事業所に認定

名古屋市では、環境に配慮した取り組みを自主的、積極的に行っている事業所を「エコ事業所」と認定する「エコ事業者認定制度」を施行している。

対象となるのは、名古屋に所在地があり、リサイクルの推進や省エネルギー・省資源の推進、環境報告の作成など 10 項目からなる「環境に配慮した取り組み及び評価点」で 6 点以上の評価点を取得していること。

名鉄も、多岐にわたる環境に配慮した取り組みが評価され、平成 19 年 6 月に市内 37 駅、サービスセンター、本社、名鉄病院が取得。鉄道駅と病院では初の認定となった。その後も、乗務区や倉庫などが加わり、現在では、名古屋市内の名鉄全 50 事業所が取得し、地域からのさらなる信頼につながっている。

また名鉄グループ各社では、より環境に配慮した事業展開を行うため、各種の環境マネジメントシステムを導入している。その結果、名鉄をはじめ 13 社が ISO14001 認証を取得、バス・タクシー・トラック関連 20 社がグリーン経営認証、名鉄バスが自動車エコ事業所認定、名鉄交通商事がエコアクション 21 認証を取得するなど、公的にも高い評価を得ている。

自治体とのタイアップ企画

企業だけではなく、自治体とのタイアップ企画も実施されている。

空港内の環境活動を学び、燃料電池バスに乗って空港内の制限エリアを見学。中部電力株式会社とタイアップした教室では、名鉄岐阜駅からエコハイブリッドバスに乗って岐阜市の「ながら川ふれあいの森」に向かい、間伐作業の見学や丸太切り体験など、自然とじかに触れ合う環境体験学習を行った。

「他業種の企業とタイアップし、子どもたちが環境について学ぶ『機会』と『楽しさ』を広げていきたい」と西尾さんは考えている。

名鉄の日帰りバスツアーハイキングでは、バスを利用したハイキングがマイカーで移動するより環境負荷が少ないことを知ってもらうため、愛知県田原市と長野県王滝村の協力を得、自然にふれて歩きながら環境について学ぶエコハイキングコースを設定した。「貴重な海浜植物に出会う伊良湖岬エコハイキング」と「愛知の水源地・牧尾ダムのあるさとを歩くエコハイキング」だ。

「当社から自治体に持ちかけ、田原市と王滝村に承諾いただき実現した。環境活動は、連携が重要。自治体にも積極的に働きかけ、賛同いただいたら、私も交通事業者ができることと自治体がお持ちの魅力を生かし、コラボレーション企画を立てていきたい」と西尾

さんは話している。

このエコハイキングは、平成 22 年 10 月に名古屋市内で開催される生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）の COP10 パートナリーシップ事業として登録された。

小学校高学年を対象とした 1泊2日の環境体験プログラム「日本モンキーセンター・スーパースマースクール」も、COP10 パートナリーシップ事業で、サルの飼育体験や行動観察を通じて生物の多様性の保全について学習した。

身近で簡単な環境活動の定着を

「電車で、E C O M O V E。」キャンペーンに込められたメッセージをさら

に深く掘り下げ、地域とともに環境について考えるイベントとして立ち上げられた名鉄エコプロジェクトだが、エコムーブトレインを核にさまざまな施策が有機的に結合し、地域でも徐々に定着しつつあるようだ。ここで紹介したイベントの他にも、各種特典を付けた「エコ・SF パノラマカード」の発売、ラジオ番組の提供、ライブイベントの開催などを実施、2 年目は初年度以上に幅広く充実した活動になった。

平成 22 年は、COP10 の開催で、地域の環境意識もさらに高まること予想される。

「COP10 の開催に合わせた企画も考え、身近で簡単な環境活動の定着につなげたい」と西尾さんは意欲的だ。



パーク＆ライド の推進

名鉄では、長年にわたりパーク・アンド・ライド事業を積極的に推進。
「自動車＋鉄道」の交通システム整備を進めてきた。
その交通システムの整備から始まるまちづくりの試みは、
地域の環境負荷低減の取り組みを支える装置として活用されている。

パーク・アンド・ライド事業の推進

鉄道と車を併用する利用者の利便性向上を目指して、名鉄は「パーク・アンド・ライド」という言葉が普及する前から、駅前の遊休地を活用、駐車場の整備を進めてきた。現在では、沿線に約290カ所、約2万1000台分の駐車場を有しており、今後も需要を見ながら整備を進めていく方針だ（管理・運営は主にグループの名鉄協商）。駐車場と並行して整備を進めてきた駐輪場も、180駅255カ所に約4万4900台分を確保している。

大型の立体駐車場建設についても早くから着手してきた。昭和61年に岩倉駅（222台）、63年には東岡崎駅（448台）など、立て続けに整備している。現在では最大規模の名鉄一宮駅（899台）を筆頭に、名鉄岐阜駅（885台）、刈谷駅（700台）、西春駅（650台）、西尾駅（470台）など、200台規模以上の駐車台数を擁する駅は17を数える。

逆に、左京山駅（4台）のように、台数が少なくても駐車スペースを確保しようとする努力がうかがわれる駅も少なくない。駅隣接地や高架下を使った平面駐車場から、5〜7階建ての立体駐車場まで、形態も規模もさまざまだが、沿線住民の生活を支えていることに変わりはない。

新安城駅の駐車場（60台）で、車



名古屋本線新安城駅の、改札を出てすぐにある平面駐車場

を停めて降りてくる60歳代の女性に出会った。豊田市内に住んでいるが、週1回名古屋市内の病院に行く時は、必ずここに駐車して、電車に乗り換えていくのだと言う。「病院まで車で行くのは運転が大変なので、パーク・アンド・ライド駐車場があつて本当に助かっている」と笑顔で語る。平面駐車場のなで使いやすく、料金も1時間100円で気軽に利用できるそうだ。

一方、国府宮駅前には、平成13年に整備された380台収容の立体駐車場がある。事前の調査では、駅周辺に多数の駐車場が存在し、パーキングの激戦区と予想されたが、逆にそれだけ需要が高いと判断、駅前の土地を駅ビルとして再開発するのではなく、駅直結型の立体駐車場建設に踏み切った。稼

働率もよく、パーク・アンド・ライド駐車場の成功事例のひとつだ。

取材時は、平日の午前11時過ぎだったが、250台以上が埋まっていた。このうち、平日定期利用者が160台余を占めており、通勤などでのパーク・アンド・ライド利用者が多いことが推測される。

雨の日は、さらに利用が増える。都心部の道路が普段よりも渋滞して移動に時間がかかるため、住民はメインの移動手段に鉄道を選択するのだ。取材前は雨だったが、その日の駐車場利用台数の推移を見ると、午前9時台で早くも270台を超え、12時〜16時は320台、19時台までは200台の利用があつた。「自動車＋鉄道」の移動スタイルが、住民の生活に定着して

特集：環境都市の交通まちづくり

[名鉄「公共交通中心」への新たな取り組み]



名古屋本線国府宮駅の立体駐車場

いることがうかがえる。

鉄道利用者へのインセンティブ

駐車場の利用料金は個々で異なっているが、パーク・アンド・ライド利用の月極め定期には「全日定期」「平日定期」「ウィークデイベスポークン」「平日昼間定期」「全日夜間定期」「マンスリーパスポート」と、利用者がライフスタイルに合わせて選べるように、さまざまな

タイプのものが用意されている。月極めでも、駐車スペースが指定されないことも大きな特徴だ。

名鉄では、パーク・アンド・ライドの推進策として、利用者にインセンティブをつける努力もしている。その1つがプリペイドカードの割引だ。名鉄協商のパーキング・プリペイドカード「Pカード」は1万円のカードで1万1500円分使える特典がついているが、指定の駅窓口で、名鉄の乗車券（SFパ

ノラマカードも含む）を呈示すると、販売価格が500円割引される。9500円の購入価格で11500円分と、2000円多く駐車場を利用できることになるわけだ。

このPカードは名鉄協商発行のプリペイドカードではあるが、名鉄沿線の駅でも販売されている。その駅窓口も平成19年度は30カ所だったが、利用者のニーズや駐車場の整備状況に合わせて現在では50カ所に拡

大され、年々駅での購入者が増加している。ここにもパーク・アンド・ライド利用の広がりが見てとれる。

さらに、名鉄百貨店では買い物金額に応じて、名鉄沿線駐車場で使える駐車サービス券を配布している。グルーピング内でしたり連携し、利用者がインセンティブを実感できるような工夫がなされている。

環境視点の交通まちづくりへ

行政サイドも、道路交通渋滞の緩和と公共交通機関の利用促進、環境負荷の低減を目指し、パーク・アンド・ライドを推進している。

「名古屋都市圏パーク・アンド・ライド推進協議会」は、名古屋市および名古屋市境から10kmにかかる自治体の行政区域を名古屋都市圏として、このエリアでの広域的なパーク・アンド・ライドを推進するため組織された協議会だ。国土交通省、愛知県、名古屋市など34市町村、名鉄をはじめとする鉄軌道事業者などで構成され、名古屋都市圏のパーク・アンド・ライド駐車場の整備と利用促進を行っている。

協議会では、パーク・アンド・ライド駐車場登録制度を運用しており、WEBサイトで鉄道路線別に「登録」したパーク・アンド・ライド駐車場を紹介している。現在の登録数は36カ所だが、21年度中には20カ所増加する予定

だ。行政も、民間の駐車場を活用して利用促進を進める。

「駐車場の整備ももちろんそうだが、名鉄では、沿線自治体の協力を仰ぎながら駅前広場の整備を積極的に推進し、キス・アンド・ライドがスムーズに行える環境の整備を進めてきた。環境視点の交通まちづくりは、行政と公共交通事業者の協力と連携が最も重要だと名鉄は考えている」と西尾さんは言う。

名鉄が長い時間をかけてつくりあげてきた「自動車＋鉄道」の交通システムが、環境負荷の低減に取り組む地域を支える装置として活用されている。



高架化事業に合わせて整備された名古屋本線鳴海駅パーク＆ライド駐車場



インターモーダル の推進

平成 22 年度末、名鉄が IC カード乗車券の導入を予定している。
自動車から鉄道へ、鉄道から端末交通へ。
交通手段をシームレスに結び、利便性の向上を図る。
IC カード乗車券を活用しての新たな試みも視野に入る。

平成 22 年度末に IC カード導入

名鉄は現在、磁気カードの「SF パノラマカード」を発行している。名鉄の他、名鉄バス・名鉄東部交通・名古屋市交通局（地下鉄・バス）・名古屋臨海高速鉄道（あおなみ線）・愛知高速交通（リニモ）と共通利用できる SF カードシステム「トランパス」に対応したものだ。平成 15 年 3 月より導入が開始され、全 275 駅中 261 駅で利用できるようになっている。

平成 22 年度第 4 四半期に新たに導入する IC カード乗車券は、名古屋市営地下鉄・バス、名鉄バス等との共通利用が可能で、電子マネー機能も搭載される予定である。駅構内や沿線の商業施設で電子マネー決済ができるように準備が進められており、パーク・アンド・ライド駐車場での利用も検討しているところだ。

また、SF パノラマカードには利用可能金額のプレミアム（2000 円で 2200 円分利用可能など）がつけられているが、IC カード乗車券にもそうした利用客へのインセンティブを用意している。利用実績に応じてポイントを付与するマイレージポイント制が採られることになった。

さらに、JR 東海の TOICA、JR 東日本の Suica との相互利用についても、24 年度中の実現に向けて検討を進めている。



地域に鉄道アクセスを提供、新たに開業した南桜井駅

IC カードとインターモーダル推進

地域と連携して、IC カードシステムを活用した新たな事業モデルの構築にも着手している。

「非接触型交通系 IC カードを活用した地域連携型コミュニティサイクル・カーシェアリング事業構築によるインターモーダル推進事業モデル」だ。

国土交通省が平成 21 年度に創設した「新たな温室効果ガス削減環境事業モデル」に選定された事業で、地球温暖化の原因となる CO₂ 排出量削減につながるモデル的な事業の可能性を国

が助成して見極めるという趣旨に基づ



名古屋市中心部ですでに開始されているカーシェアリング

自転車利用が活発な名古屋市ではコミュニティサイクル事業の可能性が期待される

き、名鉄が名古屋大学大学院環境学研究所、電通中部支社、電通リサーチ名古屋支社の 3 社と共同で提案した。

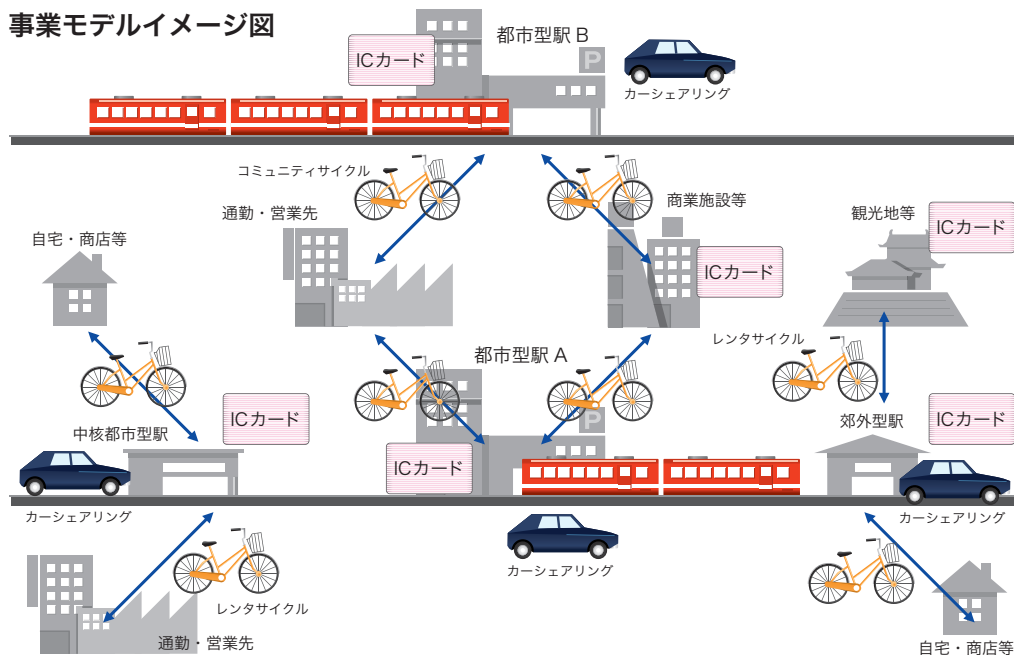
事業は、主たる移動は鉄道を利用し、線路が結ばれていない駅間や駅から目的地までの端末交通は、コミュニティサイクルおよびカーシェアリングを利用。IC カードの活用で利便性の向上と経済的誘導を図り、インターモーダルを推進するというもの。

「今はマイカーを使っているが、少し努力すれば鉄道に移行できるという人が少なくない。そういう人たちのための端末交通としてコミュニティサイクルやカーシェアリングを整備し、IC カード

特集：環境都市の交通まちづくり

[名鉄「公共交通中心」への新たな取り組み]

事業モデルイメージ図



名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

古屋市において、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

古屋市において、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

古屋市において、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

古屋市において、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

古屋市において、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

古屋市において、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

エコ通勤・エコ通学をサポート

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名

名古屋市の中心部には、同市と名古屋大学大学院が実施主体となつて、「名チャリプロジェクト」と名